



平成27年 水稻管理情報 No.2 (5月発行)

5月に入り、今年も田植えがはじまりました。昨年は、日照不足で中・晩生品種で田植え下がった圃場では充実不足で収量・品質が低下した事例が見受けられました。作付け計画をしっかりと立て、品種に応じた適期の作付け(田植え)に努めましょう。

1. 熟期が遅い品種ほど先に田植えを

多くの方が早生品種を先に植え、登熟が遅い品種をその後に植える傾向があります。確かにそうしたほうが、出穂や成熟の時期をずらし作業の分散を図る効果は高くなります。しかし、高標高地で熟期の遅い品種を作付けした場合、出穂が遅くなり、気温の低い時期で登熟不良の危険性が高まります。昨年のような気象のリスク(日照不足、低温など)を考え、標高の高いところで中、晩生品種を作付けする場合には、出穂が遅くなりすぎることがないように十分注意してください(毎年、晩生品種を先に植え安定的な生産量を確保している農家もいます)。

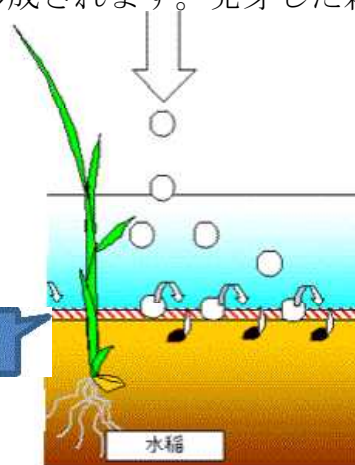
ヒノヒカリ(竹田市では64%を占める)の適地は標高400m以下とされており、昨年のような気象条件では標高が高い竹田市ではより登熟不良のリスクが高まります。

標高が高く、中・晩生品種の出穂晩限が早い竹田市で昨年のような気象リスクを回避するためには5月中の田植えが望ましいと思われまます。

2. 除草剤散布後はしっかり止水を

- 除草剤散布後は左図のような除草剤の膜が形成されます。発芽した雑草がこの膜に触れることで枯死します。散布後、**7日間**は止水し、水を動かさないことを心がけてください。

- 田面が露出すると、除草剤の膜が壊れるので、どうしても7日以内に水が抜けてしまう水田では、差し水をし、除草剤の膜(処理層)の維持に努めてください。



3. 後発雑草対策

竹田市は畜産農家が多いことから、家畜ふん堆肥の還元等による土づくりができた水田が広く分布しています。水稻栽培にとってはたいへんよいことですが、このような水田では土中の酸素不足により、初期除草剤をしっかり効かせても、後発雑草(ホタルイ、コナギ)が発生することが多く、追加防除で苦労しているのが実態かと思えます。バサグランは落水処理のため、中干し前に散布するのが通常で、分けつ期の途中に散布しにくいのが欠点となっています。また、湿田など落水がうまくいかない圃場では効果が十分に発揮されません。

しかし、近年、湛水処理の中後期除草剤が開発され、実用化されているので活用を図ってみたいかがでしょうか。

例：ハイカット1和粒剤、アトトリ1和粒剤